

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	再生の井戸：沖縄一集落における生者と死者との関係
Author(s)	石井, 宏典
Citation	茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集, 2: 1-30
Issue Date	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10109/13516
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

再生の井戸

——沖縄一集落における生者と死者との関係——

石井 宏典

要旨

沖縄本島北部の一集落において神人たちが今も継承している年中祭祀の場に着目し、2009年より参与観察を重ねてきた。本稿では水を巡る儀礼をとりあげる。旧暦元旦に井戸の若水を供えての拝み、5月5日にムラ内の井戸を巡る拝みに参加し、ムラ人たちの水場の記憶について聞きとりを重ねた。山から来る湧水は、飲み水や洗い水として使われただけではなく、生命の更新をうながす聖なる水として扱われてきた。しかし、水道が敷設され、自給的暮らしから賃労働にもとづく消費生活へと移行するなかで、人びとは自然の循環から離れ、井戸への関心を失っていった。それでも神人たちは、祭祀のたびに神々を感じる場所で拝みつけ、カミ（自然）と死者と生者の秩序と調和を懸命にまもろうとしている。そこには、自然の循環と再生のなかに人間を位置づけようとする姿勢がある。

1. フィールドと研究課題

1. 山から来る水

那覇の国際通り沿いにある古いホテルのレストランで、毎月20日の昼に小さな同郷会が開かれる。この集いに身を寄せるのは70～80代の女性たち20人ほどで、全員が沖縄本島北部・^{もとぶ}本部半島の先端に位置する^{びせ}備瀬集落の出身者である。この会には「福女会」という名があつて、郷里の象徴ともいえるフクギ並木にちなんで付けられた。メンバーの多くは、1950～60年代に戦後復興途上の那覇に出て、新天地市場と呼ばれる衣料品卸市場での商いにかかわった経験がある。

ここで紹介するのは、2014年6月の福女会のひとこまである。子どもの時代のふるさとの情景をいつも生き生きと語るトヨさんが、急に思い出したのか、水汲みに通った浜辺の井戸のことを話題に出した。「パマガー」と呼ばれるこの井戸は、潮の干満によって姿を現したり海中に沈んだりする湧水だった。集落からは南西に外れたところにあるため、この井戸を利用したのは集落の南側の人たちで、このとき会話に加わった5人もみな南に家のある人

たちだった。ただし、この湧水は、1975年の沖縄国際海洋博覧会の会場として囲い込まれ、大量の砂を運び込んで人工ビーチが造成されると、周囲はコンクリート枠で固められて蓋をされてしまった。彼女たちは、その激変ぶりとかつての面影について語っている。

〈山の葉が出る湧水〉[2014-06-20]¹

トヨ：シマ（ムラ）のパマガーがや、海の中に井戸があったのに、今の世の中になったから、いつ、いつこれは上になったか、それがわからんわけ。

節子：もう海洋博のときに。

幸子：埋められたから。

トヨ：埋めたから？

幸子：こっちにハー（井戸）があったさーね、こっちみんな埋めてしまったわけよ。だからこれ上にあがったみたいだけでも、そうでなくてこれはそのままよ。この海が埋められたわけよ。だから上になってしまったわけさ。

トヨ：〔語気強く〕だっからね、あんまりもう、びっくりして。昔の状況と今とあんまり差があるもんだから、その話しようとしてるわけよ。

幸子：海の中から真水が湧きよったの。…潮の中からだって真水が湧くもん、こうして。

トヨ：そうしてね、山にある木、木の葉っぱ、あれが湧くの。

幸子：葉っぱも湧いてくるのよ。この辺にこの木があるわけでもないのに。

トヨ：そう、そうそう。…備瀬のフクギとは違う葉っぱが、こういうところから。

節子：シーギ（スダジイ）のパー（葉）が、シーギの葉が流れてくる。

幸子：ほんとに不思議なことよ。

トヨ：もっこり、もっこり、水の湧く中にね、この葉っぱが、山の奥の。

テル子：あれ、ワラビ、ワラビの。

トヨ：ううん、シーギの葉っぱが出てきよったのよ、湧いて。

テル子：シーギよりはワラビの葉や。

ヤス：〔テル子さんに同意して〕ワラビの葉、出よった。

トヨ：わたしはシーギよく見てるわけさ。もっこり、もっこりして水が湧いてるところからこの葉っぱが。

幸子：ほんと水が湧くというのは、ああいうして湧くというのは、見たね。

トヨ：備瀬にはこの木はない、ない葉っぱがね、出てきよったわけよ。

幸子：もう何十キロも歩いて行かんと山がなかったさーね、あっちから流れてくる。

ここで会話に参加している全員が、水の中から葉っぱが湧いてくるのを目にしている。強い風の吹いた後などにとくに多かったという。トヨさんと節子さんがシーギの葉をよく見たと言えば、テル子さんとヤスさんはワラビの葉だったと主張した。いずれにしても、ムラに

はない遠い山の葉だった。近くに山のないムラではかつて、子どもたちは休日になると連れ立って遠くの山に薪を取りに行った²。だから、彼女たちは山の植生に通じており、湧いてくのが山の木の葉だとみると、水もその遠い山から流れてきたのだと直感した。トヨさんが口にした「もっこり、もっこり」という擬態語が臨場感を与え、聞き手の私にも、湧き水のなかの木の葉が目浮かぶようだった。

会話にもあるとおり、この湧水は海洋博の会場建設と引き替えに姿を隠すことになったのだが、その10年ほど前にムラには待望の水道が引かれていた。簡易水道はそれ以前からあったものの、共用でしかも塩分混じりの水だったため、井戸への水汲みはその後も続いていた。上水道の敷設によって井戸での水汲みが不要になると、それまでお世話になった井戸への関心もしだいに薄れていった。こうしたなかで、ムラは浜辺の井戸を手放すことになった。もともと、手放すという自覚があった人はまれで、ほとんどの人は人工ビーチが完成してはじめて「パマガーが消えた」という事実と直面したのかもしれない。

ムラの子どもたちにとって、この井戸の周辺は、畑地のなかの岩場に数多くの墓が混在する「怖いところ」でもあった。海洋博によってこれらの墓群は東方の丘陵地に急ぎ造られた集団墓地に移され、その跡地には遊園地ができた。そして2000年まで四半世紀のあいだ営業を続けたのちに閉園した。その後しばらく更地となっていたが、2014年には地上12階建ての巨大なリゾートホテルが完成している。本稿で取り上げるのは、パマガーをはじめとしてムラの井戸をめぐる人びとの営みである。

2. 研究の課題と視点

本研究はこれまで同様、沖縄本島北部の本部半島の先端部に位置する備瀬集落をフィールドとし、ムラの^{かみんちゅ}神人たちが行う年中祭祀の場に密着する³。行政村と区別するために備瀬集落を「ムラ」と表記してもいる。近くに川のないこのムラではかつて、生活に必要な水は、いくつかの共同井戸と天水に頼るほかはなかった。井戸は「ハー」または「カー」と呼ばれ、ムラの井戸と水に感謝する「ハー拝み（カー拝み）」と呼ばれる神行事が旧暦5月5日に神人たちを中心にして行われてきた。このムラの各家に上水道が引かれたのは1966年のことで、すでに半世紀ほどの時間が流れている。水を汲むために井戸に通う人の姿も今は見当たらず、それぞれの井戸は危険防止のために柵で囲われている。こうした環境の変化にもかかわらず、神人たちは代々の命をつないでくれた井戸を拝む行事を今も続けている。

備瀬のある本部町は、1975年の海洋博開催を契機として観光地化が進み、とくに伊江島を望む海洋博記念公園付近はリゾートホテルなどの宿泊施設が建ち並ぶようになった。そして備瀬ムラそのものも、フクギ並木を残す集落として郷愁を誘い、多くの観光客が訪れる場所となった。いま、沖縄の観光ガイドブックで備瀬のフクギ並木を取り上げていないものを見つけるのは難しいだろう。しかし、海洋博がやって来る前の備瀬は、本部半島の最深部に位置することもあって、まさに交通不便な「僻地」であった。それゆえ古い習俗や慣行を残

すムラとして、民俗学や人類学の学徒たちの関心を集めてきた⁴。本稿は、社会と諸個人の相互規定性を考察する社会心理学の立場から、このムラに近代文化の浸透が加速した1950年代半ばから海洋博にかけての約20年間と、観光地化が急速に展開している近年の動向をとりあげ、ムラの人びとのあいだに生じた変化に目を凝らしたい。

本稿ではまず、井戸への関心が薄れていくなかであって、水への感謝の拌みをつづける神人たちの姿をとりあげる。そして、年配のムラ人たちの思い出語りにしばしば登場する水場の記憶を重ねたい。ムラにおいて、潮水が混じらない真水が湧くのは、シリガーとパマガーと名付けられた2つの井戸に限られる。シリガーはかつて、産水を汲んだ産井（ウブガー）であり、毎年の正月元旦に若水を汲む井戸でもあった。一方、浜辺にあつて満潮時には海に沈むパマガーの湧水は、葬儀に参列した遺族を清めるミジナリーと呼ばれる儀礼に用いられてきた。これらのことから、シリガーやパマガーの水は、飲み水や洗い水として使用されるだけでなく、ムラ人たちはそれらの水に聖なる力を見出していたことがうかがえる。本研究は、井泉の水がどのように人の誕生や葬送の儀礼において重要な役目を果たしてきたことに着目し、井戸の拌みを現在まで継承してきた神人たちに密着することによって、ムラ人たちが生者と死者との関係をどのようにみていたのか、また人間と自然の関係をどうとらえてきたのかについて考察することを目的とする。

本研究では、旧暦元旦に若水を供えて拌む元旦ウグシーと呼ばれる神行事（2012年と2016年）と、旧暦5月5日のハー拌み（2013年と2015年）に参加し、観察を行った。また、ミジナリーとアラパシワタイ（新橋渡り）と呼ばれる葬送儀礼（ともに2016年）に立ち会うことができた。あわせて、ヌル（ノロ）や根神といった神人の方々を中心にして、ムラ人たちと出身者たちへの聞きとりを重ねた。記録手段については、フィールドノートへの記録を基本としながら、参与観察では適宜カメラやビデオカメラによる撮影を行い、聞きとりではICレコーダーによる録音を併用した。記録は随時許可を得ながら進められた。本稿の記述は、これら複数の媒体による記録をもとにしている。また調査者は、記録をとることに専念する観察者という立場にとどまらず、人手が必要とされる場面では積極的に手伝うといった姿勢で臨んだ。拌みの場では神人や参列者の後ろで一緒に手を合わせ、その前後の語りあいの輪に加えていただいた。

II. 井戸拌みの現在

1. ムラの井戸

ムラ内のおもな共同井戸を図1に示す。それぞれの井戸には名前が付けられている。飲料水を汲むための井戸は、集落北側の人たちはおもにシリガーで、南側の人たちはパマガーやウイガーだった。なお、旧暦5月5日のハー拌みのさいに神人たちが巡るのは、ニーガー、

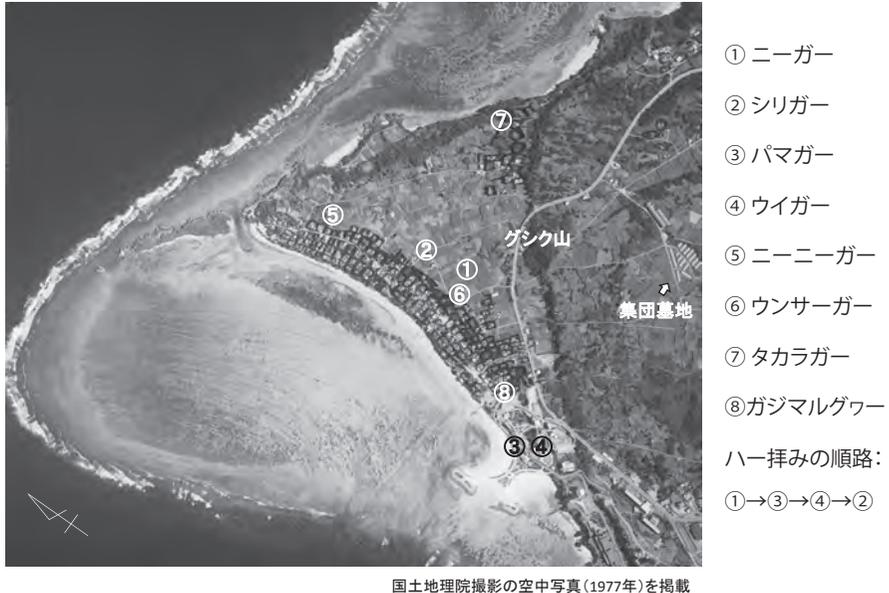


図1 おもな共同井戸

パマガー、ウイガー、シリガーの4カ所である。

a. シリガー

アサギ（お宮）の裏手を東の畑地に抜け、北に200メートルほど進んだところにある掘り抜き井戸である（写真1）。備瀬において、塩分をまったく含まない真水が湧く井戸は、このシリガーと南のパマガーに限られる。シリガーから東方向に見える丘陵地の森は、グシク山と呼ばれる御嶽である。この聖なる森からは木の枝一本たりとも取ってはいけないという禁忌があるが、それは、この森によってシリガーの水が保たれているからと説明されることがある。

この水はかつて、生まれたばかりの赤子を沐浴させるための産湯にも用いられ、出産時にはこの水で炊いたご飯（ウブク）が振る舞われた。正月元旦には、家ごとにこのシリガーから若水を汲み、その水を三度額になでて若返りを願うウビナディと呼ばれる習慣がある。この井戸水は日常的には、貴重な飲料水としてのみ利用された。洗濯にはもっぱら、近くにあったハーグワーと呼ばれる小さな井戸が使われたが、神人たちが着る神衣装を洗うときにはシリガーの水が用いられた。夏に一週間続くシニグ行事を終えると、その翌日には鹽たらいを抱えて来た神人たちが井戸端で神衣装を洗った。石鹼を使わなかった当時は、シークワサーを絞った果汁を用いたという。なお、シリガーのそばにはため池があり、子どもたちが水遊びと水浴びをする場所になっていた。

b. パマガー（浜井戸）

冒頭で紹介したように、集落から南西に外れた浜辺にある湧泉である。その昔、ウガンメー

(備瀬崎の拝所ミーウガンの前) から石灰岩を削り貫いて運び、この泉の枠に据えたと伝えられている⁵。干潮時にしか汲むことができないこの真水は、遠い山から地下水脈となって流れてきたものとみられている。シリガー同様、豆腐を造る水としても重宝された。ムラには、葬式を終えた遺族がこの井戸の水を汲み、その飛沫を三度浴びて身を清めるミジナリーと呼ばれる儀礼があり、現在も行われている。

c. ウイガー（上井戸）

パマガーのある浜辺を少し上がったところ、岩壁を背にした井戸。潮が満ちてくるとパマガーは海に沈んでしまうため、干潮時以外ではもっぱらこの井戸が利用された。若干塩分を含んでいたようだが、汁を沸かす水などには用いられた。この井戸のそばには共同の洗濯場も造られていた。パマガーと同様に海洋博会場として囲い込まれ、遊園地内の茂みにひっそりと隠れるようになった。現在はリゾートホテルの前庭の一部となり、生い茂っていた木々が剪定され、周りは琉球石灰岩の化粧が施された（写真4）。

d. ニーガー（根井戸）

集落東側の畑の中にある井戸。湧泉ではなく水を溜めた場所との伝承があり、神人たちは、ムラで最も古い、根の井戸と位置づけている。コンクリートの台座に円形の井戸が削り貫かれているが、その中をのぞいても水はない（写真2）。はるか昔に井戸があったとされる場所を刻むため、神人たちの意向によって再建されたものである。戦後しばらく経ったころ、ユタの玉城マツさん（1894年生まれ）がこの井戸の存在を告げ、ムラのヌル（ノロ）である天久千代さん（1932年生まれ）⁶が見た夢の中でその場所が示された。「あの道から何歩、こっちの道から何歩」というように位置の特定がなされたという。交通の便を考えて道のそばに造ってはどうかという提案もあったが、ヌルさん⁷たちは夢で知らされた場所に復元することにこだわった。畑の主は、井戸の再建と道を付けることを二つ返事で受け入れた。

e. その他の井戸

集落の北端寄りの人たちは、ニーニーガー（シンバーリガーともいう）と名付けられた掘り抜き井戸を利用してきた。この水は塩分をやや含んではいたが、調理にも使えた。ハー拝みのさい、神人たちはここまでは足を伸ばさないが、日々この井戸にお世話になっている近所の人たちは、シリガーでの拝みを終えた帰りに立ち寄り、拝んでいた。

本集落から畑地を挟んだ北側^{たからぼる}に高良原と呼ばれる小集落がある。北の海岸に向かう坂道の途中にある井戸はタカラガー（ワルーミガーともいう）と呼ばれており、ここに住み着いた先祖が掘ったと伝えられる。ただ、この水は塩分が多く飲み水としては適さなかったため、高良原に住む人も飲料水を確保するためにシリガーに通った。

アサギからほど近い畑の縁にウンサーガー（宇茂佐井戸）と呼ばれる井戸がある。ミーガー（新井戸）とも言われることから比較的新しい時代に掘られた井戸とされる。潮の干満によって水位が上下することから海に通じているとされ、水量は豊富だが、塩分の多い水だった。また、ヌドウンチの北側にあるチンジャガーは、ヌルさんが子どものころ学校から帰ると



写真1 シリガーでの若水汲み (2012年旧正月)

汲みに行った井戸である。この水は野菜や食器を洗うのに使われた。

2. 若水の拝み

2012年および2016年の旧暦元旦に、シリガーでの若水汲みとその後に行われる「元旦ウグシー」と呼ばれる拝みに参加した。ここでは、2012年のときの様子を紹介する。水道が引かれる以前は若水を汲むには順番待ちをするほどだったというが、現在、旧正月にこの習慣を続けている家は少数のようだ。

7:50 朝、海は強い北風が吹いて波が立っていたが、フクギ並木の中に入るとそれほど風を感じない。前日、若水汲みに連れて行ってもらえるようにヌルさんの夫の栄さんと約束していた。ヌルさんの家に顔を出すと、すぐにシリガーに向かった。栄さんは、重石をつけた泡盛の三合瓶に紐を結び、水面までつるして水を汲んだ(写真1)。もう一人後から汲みに来ていたおじさんは紐を結んだヤカンを吊して器用に水を汲んでいた。家に戻ると、ヌルさんに「上がって休みなさい」と声を掛けられ、これから家で行う元旦の拝みの手順を覚えてもらった(実見せず)。神人たちはこの日、最初に家で拝んでから、ムラの拝みをするという段取りになっている。

家での拝みでは、一カ年の家族の健康願いをする。①ヒヌカン(火の神)前に、シリガーで汲んだ若水とウグシー(酒)、茹でた豚の肝(レバー)などをのせた膳を供え、ウコール(香炉)に12本(1ヒラ6本の2組)の線香を立てて拝む。つぎに、②トゥパシリ(仏壇間の戸口)で、湯飲み茶碗に塩を入れて香炉の代わりにし、12本と3本の線香を立て、同じ膳を供えて拝む。3本の線香は切手の意味で、ウジョーバン(御門)の神様に家からお宮宛てに通してもらうために添えるのだという。③トク(床の間)のある家は、一年間とおして床の神様に

徳を招いてもらえるようにと、線香を立てて膳を供えて拜む。最後に、④仏壇で同様に先祖に手を合わせる。一連の拜みを終えると、家族揃って、若水を額に三度撫でつける。この行為をウビナディと呼ぶ。このとき、「とうしゃー、かじゅとういん、ちゃーわかげーわかげー（年を重ねても、いつも若々しく）」などと唱えながら撫でる。子どもが小さいときは母親や祖母が撫でてあげた。

11:10 ヌンドウンチ（ノロ殿内）に神人の3人が揃う。お供え物の準備をし、少し会話を楽しんでから行事開始の拜みを始める。ヒヌカン、ウタナ（御棚）、トクの順に香炉の前に置かれた小さな盃に若水を注ぎ、手を合わせる。その後、隣のニーヤー（根屋、ムラの草分けの家）に移動し、ヒヌカン、ウタナ、トク、仏壇と同様に拜む。

12:00ごろ お宮に移動する。根神が神殿に入り、ロウソクに火を点け4つの香炉に線香を立てる。この日、神人は神衣装を着けない。ヌルと根神は神殿の中に入り、追って居神が、若水とウグシーの入った2本の銚子、炊いた豚の肝と赤肉（赤身の肉）の皿をのせた膳を持って神殿の中に入り、3人で拜む。そのあと拜殿側に出てお宮に向かってもう一度手を合わせ、供えた肝と赤肉に箸をつける。盃に入った若水とウグシーをウタムトゥ木の向こうに三度注ぐ。

拜み終えて、ヌルさんが盃の若水を自分の額につけると、根神の松枝さん（1937年生まれ）が微笑みながら「わたしにもお願いします」と眼鏡を外した。ヌルさんも笑顔になって、「百二十歳（ひやくはたち）まで健康でいられるように」などと言いながら、松枝さんの額を若水で三回撫でた。つづけて、居神、手伝い役の枝美さん（根神の娘）の額にウビナディをした。それを見て思わず、「ぼくにもお願いします」と申し出ると、みんなで笑い合うなか、ヌルさんは額に若水をつけてくれた。

それから供えたウグシーを回し、肝と赤肉をみなでウサンデーする（供えたものを下げて頂く）。肝を供えるのは、チムジュラク（肝清く、すなわち心がきれいに）なるようにとの願いが込められていると松枝さんが教えてくれた。

12:50 ナカリユグに移動する。海は、強い北風が吹いており、リーフに白い波が立っていた。香炉に線香を立て、お宮と同様、お膳を供えて拜む。拜んだ後、肝と赤肉に箸をつけたのち、盃に入った若水とウグシーを香炉に三度に分けて注ぐ。この竜宮では一年間の大漁と航海安全の祈願をするのだという。「ここでもウサンデーするんだよ」とヌルさんが笑って言うが、風が強いために早々に切り上げる。

ヌンドウンチに戻って行事終了の拜みをした後、ふたたび肝と赤肉をウサンデーしながら、昔話に花を咲かせる。肝は塩をつけて食べると美味しかった。ゆったりとしたおしゃべりは15時前まで続いた。

3. ハー拜み

2013年および2015年の旧暦5月5日に行われたハー拜みに参加した。ここでは2013年のと

きの様子を紹介し、あわせて2015年時のエピソードも添えたい。

7:40 一昨日、今日の行事のために、ヌルさんの夫の栄さんたちがシリガーの周囲の草を刈り払い機で刈っておいたという。その刈られた草を熊手で片付ける作業を手伝う。例年なら井戸の周囲だけでなく、内側に伸びた蔓状の草を刈ってきれいにするのだが、今回はそのままになっていた。ヌルさんは「中はやっていないでしょう」と案じていたが、急なことで人も頼めず、今回は諦めようということになった。午前中、ヌルさん夫婦は畑で芋掘りの作業にあっていた。

13:40 ヌンドウンチにヌル、根神、居神の神人3人が集合し、平服のままで行事開始の拝みをする。ヒヌカンはヌル、ウタナは根神、トクは居神が線香を立て、この順に拝む。拝みの後には、子どもごろの思い出話を花を咲かせた。水汲み話からはじまり、ランプのホヤ掃除、休みに山への薪取りをしたという話題が続いた。根神の松枝さんがよく通ったウンサーガーは海とつながっていたのか、潮が満ちると塩辛かったと話す。

14:30 お宮に移動すると、まず根神が神殿の中に入り、ロウソクに火を点け、4つの香炉に線香を立てる。ヌルと根神が神衣装を着けて神殿の中に入り、膳に載せたミハナ（米）とウグシー（酒）を供える。区長をはじめとする参列者は、12本（2ヒラ）の線香を手渡され、各自受け取ると額の上あたりに捧げてから返す。根神は全員の線香を受け取って神殿の香炉に立てると、ヌルの主導で全員が手を合わせる。ヌル、根神が拝殿側に移り、ウタムトゥ木の前に先の膳を供えて拝む。その後、ウタムトゥ木の向こう側にウグシーを三度注ぐ。拝み終わると神人たちは参列者のほうに向かい、ウグシーの盃を回す。このときの参列者は神人3人、区長、手伝い役を務める根神の夫（辰雄さん）と娘（枝美さん）、そして私の7名だった。お宮から各井戸への車での移動は区長と辰雄さんが運転手を務めた。

15:05 ①ニーガー：車2台に分乗してお宮からほど近いニーガーそばまで移動する。円形のセメント製のニーガーは畑の真ん中にある潤れ井戸である。炎天下、井戸の前におかれた香炉代わりの石に火を点けない線香（ピジュルウコーと呼ばれる。他の井戸でも同様）を添え、ウグシーとミハナの膳を供え、神人たちが手を合わせる（写真2）。このとき、東の方角に向かう。拝み終わると、ヌルと根神がウグシーを井戸に三度注ぎ、ミハナを散らす。東に向かって拝むのは、水は山から来るからとヌルさんが後で教えてくれた。

15:20 ②パマガー：備瀬集落の南端に位置する海洋博記念公園の南ゲートまで車で移動すると、警備員に入構証を示してから公園内に入り、人工ビーチの入り口に車を止める。かつて干潮時にしか姿を見せなかったパマガーはビーチ前の植え込みのなかに囲われている。松枝さんは、海洋博の工事が終わったとき、あまりの変わりように「パマガーはどこに行ったの」と思わず口にしたと教えてくれた。「とってもおいしい水でしたよ」と添えた。枝美さんも、パマガーのことは今でも夢に見ると語った。拝む手順は先のニーガーのときと変わらないが、ここでは西の海（竜宮神）に向かう。このとき、建設中のホテルの現場監督を務



写真2 ニーガーで拝む (2015年八一拝み)

めているという作業服姿の男性が神人たちの後ろで一緒に手を合わせていた (写真3)。

15:40 ③ウイガー：基礎工事の進むホテル用地に入ると、ガンヤー辺りがすっかりむき出しになっていて、かつての薄暗さが消えていた。ウイガーの周囲の木々も伐られ、新しい石囲いの井戸の前には、真新しい香炉が据えられていた。神人たちは、その上に線香を置いて山手のほうに向けて手を合わせる。拝み終えると、ヌルさんの指示を受けた松枝さんが先の工事監督者の頭にミハナを散らし、井戸の周辺をきれいに整備してくれたことへのお礼の言葉を伝えていた。

16:00 ④シリガー：車でふたたび集落方面に戻り、畑の中のシリガーに移動する。井戸前の香炉に線香を添え、これまでと同様、お膳を供えて東を向いて手を合わせる。ウグシーを香炉に三度注ぎ、ミハナを散らす。さらに神人3人はそれぞれ持参した重箱の蓋を開けて供え、再度拝む。拝み終えると、シリガーを背にして輪をつくり、供えたお重を開く。神人3人のお重からご馳走を盛ってもらい、みんなで一緒に食べる。ヌルさん手作りのお重には、揚げ豆腐、カマボコ、三枚肉、揚げ芋餅、イラブチ (魚) 揚げ、モズクの天ぷら、島ダコが詰められていた。松枝さんは「昔は、神人たちが他の井戸の拝みをすませてシリガーに到着するまでおばあちゃんたちがお重を下げて待っていましたよ」と話す。今回、待つ人はいなかった。シリガー近くに実家のあった辰雄さんは、ため池で水浴びした子ども時代のこと話してくれた。池は素掘りで、中央に石が立っていてそこに登って飛び込んだという。牛馬の水浴び、水肥を入れた桶を洗い、人も体を洗う。いちおう場所は別れていたが、同じひとつの池だった。

17時すぎにはお宮に戻り、行事を終える。お重とウグシーに使った四合瓶を持って、ヌルさんの家までお供する。



写真3 パマガーで拝む（2013年ハー拝み）

2015年のハー拝みのさい、シリガーでのエピソードを2つ添えたい。

〈井戸の恩〉 [2015-06-20]

パマガーとウイガーでの拝みを終えてシリガーに移動してくると、年配女性の3人組が、井戸の前の香炉に線香を添え、菓子や果物などを供えて手を合わせていた。彼女たちは神人一行に香炉前の場所を譲ると、シリガーでの拝みに加わった。そして拝みを終わると、神人たちに礼を述べて立ち去った。

区長の善久さん（1947年生まれ）が後で教えてくれたところでは、3人のうち2人はヌルさんの家近くに実家がある姉妹で、彼と同級生の妹は名護で飲み屋を経営しているという。今回はその商売繁盛を願って拝みに来たとのこと。かれらの中学時代に簡易水道が引かれたのだが、井戸の水にお世話になった女性たちのなかには、身辺が落ち着く50～60代になると井戸への関心が湧く人たちが少なからずいるのだという。そうした人たちは、ハー拝みの日に限らず、自分の都合に合わせて拝みに来ている。

〈アタビチャ（カエル）の歌を合唱する〉

シリガーで手を合わせ、お重を供えてもう一度手を合わせる。ウサンデーは神人3人を含む8人が車座になり、神人たちが持参した重箱の手料理をいただきながらの四方山話になる。すぐ近くに見えるため池で泳いだという話から、カエルの話になり、神人の手伝い役の和恵さん（69歳）が「アタビチャ（カエル）は何かの薬になるからとよく捕った」と話しながら、つぎの歌をうたい出した。

アタビチャぬー、ムムジシやー、ナビグワーねー、ちゃらみかちー、ちゃんなませとー
（カエルの、もも肉は、小さな鍋で、炒めると、とってもおいしいよ）

カエルのモモ肉は、いまのチキンよりも美味しい最高のごちそうで、栄養不良の子どもに食べさせたり、熱冷ましに使われたりしたと教えてくれる。和恵さんが、「昔はアタビチャがたくさんいたけど、今は見えないね」と言って、もうひとつの歌を口ずさみ出した。すると、松枝さんとヌルさんも声を合わせての合唱となった。聞き覚えのあるメロディーは「オタマジャクシはカエルの子」だった。

ヤーグワーの、ヤーグワーのタンメーさい、アタビチャすぐいがめんそーらん、ウムニーかむぐとうまっちょーけ、まちーんまたらんさちなやびら

(分家の、分家のおじいさん、カエルを捕りに行きましょう。イモ練りを食べているから待つてなさい。待つに待ちきれないから先に行きます)

どちらの歌も食の対象としてのカエルを歌っている。これらの歌は、戦前、今の80代になるおばあたちが小さいころによく歌われたものという。座はその後もしばらく、童歌や毬突き歌の披露が続いた。

III. 水場の情景

1. 水汲みと水浴び

戦前のムラの水事情について、『備瀬史』は次のように記している。1927年生まれの著者が子どもころの様子を伝えたものと思われる。

「昔から飲料水の井泉が少ないわが備瀬では、飲み水には困窮した。天水を溜める水タンクを設けた家庭は僅かであった。瓦葺きの家を建てる場合には、大抵附帯工事としてコンクリートの水タンクを設けていたので、天水を集水して飲料水に使用していた。ところが茅葺きの家庭においては、生け垣の福木やイスの木に藁、スルガー（棕櫚の皮）を巻きつけて水甕に通し水を溜めていた。…どの家庭でもトンガ（台所）の前に大きなパンルー（水甕）を二個据え飲料水や生活用水を貯えていた。そしてこれが尽きるとシリガーやパマガーから飲料水を汲んできて使用していた⁸⁾」。

1945年3月当時、瓦葺きの住家はムラ内で36軒（全戸数の19%）だったという⁹⁾。台所の前に水甕が2つ置いてあるのは、それぞれ飲み水と洗い水を入れておくためである。減るのが早いのは洗い水だった。ヌルさんもまた、学校から帰ると桶を持って近くのチンジャガーに水汲みに行った。この井戸の水が少ないときには、南側のミーガー（ウンサーガー）まで足を伸ばした。

〈水汲みは自分の役目〉 [2013-08-27]

ヌル：（イモ洗いは女の仕事という話題につづいて）水汲みもほとんど女だったはずよ、よくシリガー行って飲み水、学校から帰ってきたら。この、あれありよったわけさ、パンルー

とって。

聞き手：あ、(水) 甕ね。

ヌル：甕がありよったの。甘い水入れるのと、(言い換えて) シリガーの水入れるのとね、またあの野菜なんか洗うのはまたこっちの井戸から、ちょっと潮水 (が混じっている)、チンジャガーといってもある。またミーガーといってもありよったからね、こっちから。…向こうから、潮水取ってきて、かならず学校から帰ってきたら、桶担いで行きよったよ。いっぱい入れたらまた遊びに行きよった。もうこれが、もう自分の仕事だったから [笑う]。

聞き手：女の人は水汲みで、男の子は何やるの？

ヌル：男の子も水汲みするけど、ほとんどが女のあれ (仕事)。また男の方はね、ヤギ、各家庭養って、牛も、これまた草刈りたり。

戦後は、円柱型のコンクリート製貯水タンクを設置する家庭が増えていった。タンクを造る職人がムラ内にも現れた。また、水を運ぶ道具は重い木桶から軽い一斗缶に変わった。和恵さん (1945年生まれ) の家にはタンクはなく、学校から帰ると天秤棒に吊した2つの一斗缶で水を運ぶのが彼女の日課だった。集落の北側に住んでいたのニーニーガーに通った。水は塩分が混じってはいたが、飲み水としても使ったという。1950年代後半の様子である。

〈井戸端で髪を洗う〉 [2014-12-12]

和恵：昔はほら、水道も何もないでしょ、学校から帰ってくると2つの缶の、油入れる一斗缶あれを2つやって、ここの井戸から汲み上げて、みんなが来ないうちに早くしないと、いっぱい帰ってきたらみんなが汲みに来るわけですよ。水道がないから。

聞き手：それどこの？ 飲み水の話ですか？

和恵：飲み水の話よ。

聞き手：飲み水は、シリガーまで行くの？

和恵：シリガーじゃなくて、もうひとつここにすぐ近くにある (ニーニーガー) …

聞き手：ここも飲めたんですか？

和恵：そう、飲めたんですよ。…で、自分たち小学校から中学校時代、月夜になると、この周囲は、井戸があつて、周囲にセメンでぜんぶこうして洗濯とかやられるようになって、あのときは髪洗うのも髪洗い粉って、土みたいな粉のが袋に入ってあつたのよ。あれと、シャンプーっていうのはないから、ハイビスカスの葉っぱ、ハイビスカスの葉っぱをこうしてやると [手をこすり合わせながら] すごい粘りが出て、あれでつぶしてから、これで髪洗って。月夜の晩になると、土曜の晩とかになると、みーんなあっち行ってから髪を洗ったり、井戸で。暑いからそれでお風呂入ったり (水浴び) とかして、そんなしてやってきました。…夏だから (井戸の) 冷たい水で。

集落南側の人たちは浜辺に湧くパマガーとその上手にあるウイガーに通った。満ちると海の下に沈むパマガーは子どもたちの格好の遊び場でもあった。勝子さん（1939年生まれ）は、潮が引いているときには水を汲み、満ちているときにはその周辺で飛び込んだり潜ったりして遊んだ。そしてウイガーでは洗濯をした。1950年前後の光景である。

〈水場の遊びと水汲み、洗濯〉 [2015-03-20]

勝子：（満ち潮のときは海水でパマガーが）埋まりよったのよ、ずっとずっと埋まりよったね。…そして、もう潮が引いたらこれが出るから、汲みよったよ、バケツに汲んでお家に持って行きよったよ。…引いてるときはあふれてよ、湧き水がこう、冷たくて、美味しかったから、汲んで行きよったけども。もうちょっと時間経ったら埋まるさーね、そしたら浴びるわけよね、学校帰ってきたら。…こっちにね、ちょうど海水浴する、こう、もうドラム缶こっちに立ててから、…大人が立ててあげてるわけ、こっちに。こっちはね、ウニとかあんなの危ないの、サンゴとか空けて、こっちは砂にこうしてね、海水浴場造ってあったよ、こうして。そうしたらねもう、ここにね、このドラム缶から飛び込んでさ〔笑いながら〕、跳んでこっちに、みんなこうして遊ぶわけよ。そしたら、そのハマガーがこっちにあるから、こっちに潜って行って、こっちから湧くわけよね。ここまで潮でしょう、満ちてるから。そしたら顔うずめてから飲みよったよ。こうして、こうして潜って行って、こっちによ。一人ずつ、みな、「はい、交代」って〔声をあげて笑う〕。

聞き手：それじゃあ、水は冷たいんですか？

勝子：冷たかった、とっても冷たかった、湧き水。…だから2つあったからね、あっちの上の方にも。

聞き手：あ、ウイガーってやつだ。

勝子：ウイガーと言ってね、こっちに新しくわたしなんかが中学校ごろに掘ったのと、昔からのと、あったわけ。洗濯したり、こっちから汲んで行きよったから、担いで行きよったからお家に。学校帰ってきたらもう水汲みよったから、かならず。…そして水汲みながらここ（パマガー近く）で遊びながらまた海水浴して、みんなこっちで遊びよった。こっちで遊んで、もう夕方、日暮れるころになったらまたみんな帰ろう、帰ろうして、ちょっと部落から外れていたから。…もう学校帰るでしょう、もう海水浴場で、すぐ洋服（の）ままよ。…洋服まま飛び込んだ。あとまた盥持って行ってそのまま洋服は洗濯して〔笑いながら〕、石鹸持って行って、洗濯してゆすいで帰りよったよ、毎日。盥グラー持って行って。洗濯もついでだったよ、これ洗濯もしながら〔笑う〕、洗濯しながら。家族のもん持って行きよったよ、たまに。

かつてパマガーとウイガーに水汲みに通った人たちは、その周辺は怖いところだったと口を揃える。現在は大阪に住むチエ子さん（1937年生まれ）も、これらの井戸に一人で行く

ことはなく、かならず友だちと連れ立って行ったと教えてくれた。

〈一人では行かないところ〉 [2017-08-08]

チエ子：(水汲みは) 学校から帰ってきてから、…とにかく日の明るいうちな。そうじゃないと蛇も出て来るし、怖い、あの当時は。あつこ怖いとこでしたよ。

聞き手：あ、そうですね、ガンヤー（龕屋、後述）とかもあるしね。

チエ子：ガンヤーもあるしね、あそこは普通は一人ではよう行かんかった、みんな連れて、「行こか」というような感じで、「ウイガー行くけど行こうか、洗濯しに行こうか」つてね、みんな連れあつて洗濯もしに行きました。

聞き手：一人で水汲みに行くことはしない？

チエ子：それはあんまりいなかった。かならず誰かがおりました、誰かがおりました。

2. グソ一のなかの湧水

集落南端の道ばたに生えているガジマルの木は、ムラ人たちが「ガジマルグワー」と名付けた特別な木だった(図1の⑧)。この木から浜側に下ると「ミジパイ」と呼ばれる海への排水溝があった。このガジマルとミジパイを結ぶ辺りは、ムラ人たちにとって、生者の世界と死者の世界を分ける境界となっている。つまり集落からみて、向こう側(南西側)は死者の住む「グソ一(後生、あの世)」であった。その一帯は石灰岩の岩場を抱えた畑地で、とくに海岸近くの岩壁には洞穴を利用した墓や掘り抜き墓が密集していた。またその崖を背にして、ガンヤーと呼ばれる龕(ガン)を納めるための小屋が建っていた。龕は、葬式のさいに遺体を納めた棺を墓まで運ぶための輿こしである。パマガーやウイガーに水を汲みに行くには、この恐ろしげな雰囲気醸す場所へ入っていかなければならなかった。以下、死者をグソ一に送る諸儀礼を紹介したい。

かつて、人が亡くなったときには、龕を担ぐ4人の男たちが選ばれた。彼らはまず、ガンヤーの前で誰が亡くなったかを伝える拝みをしてから、ガンヤーの扉を開き、中の龕を取り出した。龕を戻すときはまた、御飯を供えてお礼の拝みをした。

(1) 葬式の夜のマブイウイ(マブイフイ)

葬式の日、墓まで龕を担いだ4人の男たちには、その晩にもマブイ(靈魂)を追うという重要な役目が待っていた。彼らは喪家の内外でお椀に入れた潮水をはじき、浜で拾った砂利(ウル、枝サンゴが砕かれたもの)を撒き、払う。その後、集落をつらぬく通りに出て「ホー、ホー、ホー」と叫びながら、南に向かって走っていく。そのさい、目には見えないマブイを追い立てるために、フクギの生垣をゲーナブチ(ススキを数本束ねたもの)で叩き、砂利をあちこちに撒く。そして集落の南端まで辿り着くと、ガジマルグワーの下で故人が使っていたお椀を割った。このとき各家では門口にフクギなどの枝を横たえ、マブイが敷地内に侵入

するのを防いだ。ヌルさんも子どものころ、人が亡くなったと聞いたらすぐに枝を横たえて家に籠もった。晩に聞こえた「ホー、ホー、ホー」という男たちの声とフクギ並木に石が当たる音がいまでも耳に残っている。

〈マブイを追い立てる〉[2014-12-12]

ヌル：〔語気強く〕怖かったよ、ほんと、もう小さいときには。(外では)何かね、どんなやっているかわからんけど、この人(故人)が食べたお椀にね、浜から石もってきてね、「ホー、ホー」と言ってや。みんなもう、走りながらぜんぶ、もう、フクギの中なんかパラパラ(石が葉に当たる音)っていうでしょう。ほんとに怖かった。石(投げながら)、向こうまで。で、向こう(ガジマルグワー)行ってこのお椀(を割った)。

向こうのお椀を見たら、昼なんかこっちから歩くときに、夜はこっち歩いたことないけど、昼なんかは(現在の)向こうの海洋博(公園)のところのうちなんかの実家が畑がありよったから、こっちから行きよったけどね。昼でも、うち、こっちは怖かった。みんなお椀なんかいっぱいここに置いてあるさーね。

このときに追い立てるマブイは、死者の霊魂なのか、あるいは臨終の場を嗅ぎつけてやってきた魔物のようなものなのか。この点をヌルさんに問いかけてみた。すると彼女は、死者のマブイは四十九日までは家に通うのだから、追い立てているのは死霊ではないと思うと語った。沖縄大学の学生たちが1972年に備瀬で行った調査(以後、沖大調査)では、この儀礼は「部落から魔物を追い払うとの意である¹⁰⁾」と書き留められている。一方、『備瀬史』は、「死霊を追い払う」とし、ガジマルグワーでの儀礼についてはこう記す。「その木の下で、マブイビーグワー(死霊を弔う火)を焚くとともにお椀を割る。そのとき、「死んだ以上、霊魂は迷わずに極楽浄土を踏まれるように」といった意味の祈りをする。それを終えての帰りは、死霊に追われるような怖さから、先を争って走っていた¹¹⁾」。どちらか一方が正しいと決める必要もないだろう。ムラ人たちは男たちの声の先に魔物や死霊の存在を感じとっていた¹²⁾。また、「追い払う」というと、ただ邪険に扱う印象を受けるが、マブイが赴くべきグソーを教え諭すという意味も込められていた。

この儀礼がいつごろまで続いたのかは定かではないが、『備瀬史』は、墓に納めた遺骨を数年後に取り出して洗う洗骨の習俗が、隣村に火葬場ができた1959年以後しだいに消えていったと記している¹³⁾。おそらく、マブイウイも同時期までには行われなくなっていたのではないか。なお、マブイを追うために潮水が用いられたことに留意しておきたい。

(2) 葬式から3日目のミジナリー

葬式の日、近親者を除く多くの参列者は、グソーとの境界に立つガジマルの木まで籠を見送り、ここで故人との別れをした。その後、分かれ道を浜に下り、潮水をかけて身を清めた。

一方、近親者たちは、葬式から数えて3日目に潮の引きどきを見はからってグソー側にあるパマガーに赴き、ミジナリーと呼ばれる儀礼を行う。干潮時に行うのはこの井戸から水を汲むためだが、ヌルさんによれば、災い事は潮で押し流すために引き潮時に行い、祝い事は逆に満ち潮時に行うという習いであったという。そして、このミジナリーを主導するのは男の役目だった。

まず、パマガー近くの砂浜に移動して海に向かって膳を供え、線香を焚いて竜宮神を拝む。膳には、酒、米（ミハナ）と洗い米、大根の和え物を載せる。それから、遺族たちは揃って波打ち際に歩いていき、ひとりの男性がゲーナブチ（ススキの束）を潮水に浸け、参列者に向かって3回振り、飛沫をかけて清めた。その後、パマガーに戻ってふたたび膳を供えて拝んだ後、今度はこの湧水に浸したゲーナブチを3回振って飛沫で皆を清めた。さらに、このとき汲んだ潮水と井戸水を故人の家に持ち帰り、病臥に伏していた床や家の周囲をはじめに潮水で清め、それから井戸水で清めた。

この儀礼は、すべての家で行われているわけではないが、現在も続く習慣である。ここで、潮水と井戸水を用いて2度の清めを行っていることに注目したい。

(3) 四十九日、グソーとイチミの別れ

亡くなった人のマブイはしばらくのあいだイチミとグソーをさまよっているとされる。そこで、四十九日にはマブイアハーリ（マブイワカシ¹⁴）という儀礼が行われる。「シンジュークニチの日、夕方、家族の者が集まり、餅、豆腐等を二番座の入口に供え、外に向かって「イキビキムンヤーイキヨー」（行くべきものは行きなさい）といって、今日からこの世とあの世の別れだからとの意でマブイアハーリをする¹⁵」。ヌルさんに聞いてみると、この別れの拝みはやはりトゥバシリ（仏壇間の入口）で行うことを教えてくれた。昔、民家に玄関はなくここから出入りした。つぎの語りにおいて、「グソー」は死者および死者の世界のことを指し、「イチミ（生き身）」は生者および生者の世界のことを指している。

〈グソーとイチミ〉 [2017-09-17]

ヌル：四十九日まではもう、朝から晩までご飯みな、やる（お供えする）から。また四十九日になったらや、…どんないい人でもや、「グソーと人間とはいつでも一緒にはできないから、グソーやグソーの道、イチミはイチミで生活するから、今日からはや、四十九日も終わったからグソーに行って、また一日、十五日、何かあったらや、お家来てしなさい」つてりち（言って）、やる。

四十九日までは毎日、朝晩の食事を仏壇に供えて故人と家族は共食し、そして初七日から7日ごとには親戚、知人が集まって焼香をする。そして四十九日を境に死者のマブイはイチミを離れグソーに赴くことが求められる。それから先は、毎月一日と十五日のお茶を仏壇に

供えるときに、またお盆などの折りに、グソーから家にやって来ると考えられている。

葬式の日、亡骸は龕で運ばれ墓に納められる。しかし、マブイ（靈魂）は赴くべき場所をまだ心得ず、家の周辺でさまよっている。だからその晩、龕を担いだ男たちはマブイをガジマルグワーまで追い立て、あなたの居場所は向こう側の世界つまりグソーなのだと、生前使われていた茶碗を割りながら諭す。葬式から3日目には、遺族は潮水とパマガーの水をかけて自らの身と故人と暮らした家を清める。そして四十九日には、別れの拝みをして死者のマブイをグソーに送り出す。

IV. 1950年代以後の変化

1. 自給から賃労働へ

井戸への水汲みは、ムラの各家庭に水道が引かれることによって不要になった。表1に、1950年代以後に急激に変わっていったムラの生活についてまとめた¹⁶。この年表から読みとれるムラの変化についてつぎの3点を指摘したい。

(1) 水道、電気、ガス、自動車道など、基盤施設の整備

これまでみてきたように、かつて生活用水の確保は、ムラの共同井戸と各家が備えた天水タンクに頼っていたが、1960年代に入ること簡易水道が引かれた。ただ、数戸共用でしかも塩分が混じる水だったため、渇水時の井戸通いは欠かせなかった。1966年に全村（当時、上本部村）に水道が敷設されると、各家屋内での使用が可能になった。電気は、戦後間もなく発電機が導入されたが、供給が不安定で時間制限もあったため、石油ランプのホヤ磨きは子どもの日課としてしばらく続いた。集落内に届く配電設備が完成したのは1968年であった。煮炊きに使う薪を遠くの山まで採りに行ったのは1950年代までで、その後、調理用の燃料は石油を経てプロパンガスに変わった。車が走るための道路は、1969年に名護～本部間の海岸線が舗装され、備瀬入口を通る道路も海洋博の開催に合わせて砂利道から舗装道路へと変わった。こうした社会基盤の集中的な整備によって、ムラの人たちは井戸への水汲みや遠い山への薪取りなどから「解放」されて「便利さ」を享受できるようになった。ただし、それらの便利さを手に入れるには、すべて「お金（貨幣）」が必要となった。

(2) 半農半漁の自給的生活から商品作物を中心とする農業へ

海岸線沿いに形成されたムラでは、主食となるイモ（甘藷）を中心にしながら、粟・麦・大豆・ソラマメ・蔬菜などを育てる農を基本とし、目の前に広がる珊瑚礁の海から豊富な魚介類を得る半農半漁の自給的な暮らしを営んできた。農の営みはまた、豚やヤギなどの家畜を飼って堆肥をまかなう有畜農でもあった。こうした農耕と漁撈採取を中心にした暮らしは、

表1 戦後の生活環境の変化と人口推移

西暦	備瀬	人口	男	女	世帯	上本部周辺	上本部人口
1945	4月、米軍の侵攻					4月、米軍の侵攻	
46	各地からの引揚者続く						
47						本部町から上本部が分村	
48	中部の軍作業（基地建設）に出る男たち	1853	782	1071	327	上本部飛行場周辺に立退命令	
49							
1950	戦没者慰霊塔建立、発電機導入						6542
51							
52	那覇の新天地市場に向かう女たち続く	1574	635	871	313		
53							
54	那覇郷友会の結成					伊豆味でパイン工場操業	
1955	山への薪取りこのころまで	1290	572	718	264		5749
56	普天間郷友会の結成					島ぐるみ闘争	
57						台風フェイの来襲	
58	サトウキビづくり本格化（単作化）					（50年代後半から砂糖ブーム）	
59	簡易水道					北部製糖創立、東にパイン工場	
1960	イモや粟の畑が減り、キビ畑が増える	1143	504	639	258	上本部村役所、火災	5077
61							
62	60年代に米食へ移行						
63						（日本政府、砂糖貿易を自由化）	
64	エンジン付きサバニの導入					上本部村、畜産振興を図る	
1965	スイカづくり盛ん	985	444	541	235		4589
66	上水道の敷設					上本部全村水道、給水率84%	
67	パイン工場に働きに出る女たち					本部高校開校	
68						本部半島の舗装工事進行	
69	集落内、全面点灯（終夜灯）						
1970	養豚67戸305頭（農業センサス）	705	312	393	254	上本部村、養豚466戸2127頭	3488
71						本部町と上本部村が合併	
72	養豚38戸156頭（沖大調査）					沖縄県となる	
73	集団墓地への移転（363基）					海洋博会場の工事始まる	
74	豚が消える、人工ビーチの造成						
1975	県道114号（備瀬線）舗装化	815	418	396	256	海洋博の開催	

人口、世帯数は、1948年および1952年の備瀬（『備瀬史』）を除き、すべて国勢調査による。

それぞれの家を基礎単位として生産と消費が循環する生活形態だった。もちろん、紡績行きなどに象徴されるムラ外への出稼ぎは戦前からおこなわれていたが、それはまだムラでの自給自営の生活を補完するためのものだった。しかし、1950年代後半になると、砂糖ブームの波を受けて換金作物であるサトウキビの単作化が進行する。自給用のイモや粟の畑が減り、主食には、輸入されたアメリカ米を購入するという生活になった。こうしてムラの営農は産業としての農業という色彩をおびるようになり、換金＝商品作物を販売して得たお金で必要物資を購入し、また水道や電気を利用するという生活に移行していった。傍らでは自給的な半農半漁の営みも続いてはいたが、しだいに生活の周辺に位置づけられるようになった。

(3) 身近な賃労働への従事と消費生活の浸透

1972年の沖縄の日本復帰とともに振興開発計画が立てられると、「本土」との格差是正を謳った社会資本の整備がさらに進められた。建設業界は活況を呈し、その波がムラにも及ん

だ。また1975年の海洋博開催をきっかけに観光関連産業が成長し、多くの雇用の場を提供した。さらに、医療や福祉施設の整備拡充に伴い、それらの現場で働く人たちも増えていった。それまでは賃労働に就くためには都会に出る（出稼ぎ）必要があったが、身近にこうした雇用の場ができたことによって、遠出せずとも近くで稼げるようになった。ムラでも、青壮年期にあれば男女を問わず家庭外の職場で賃労働に従事するのが一般的となり、多くの人が家庭と職場を往復する日常を送るようになった。家庭は、生産と消費の循環を手放して、消費の舞台へと変わっていった。そして、半農半漁の自給的営みを中心にして生活を立てるという将来展望を描く若者はほとんどいなくなった。

いま辿ってみた、1950年代半ばから1970年半ばにかけて生じた生活の変化をより具体的に理解するために、その渦中を生きてきたひとりの男性とその家族の歩みを紹介したい。彼の人生にも、いま指摘した3つの変化が刻まれていることが確認できるだろう。

〈網元の家で育った男性の生活史〉

1952年、伊江島を望む浜辺の家に長男として生まれた。父方、母方の祖父ともに舟主で、父方の祖父は網元でもあった。後に父親が網元を継いだ。小学校に上がる前から祖父のサバニ（漁に出る木製の舟）に乗せてもらい、子供用のエーク（櫂）を漕いで遊んだ。小学1年の途中まで備瀬で育つ。当時は三食ともイモで、学校にもイモ弁当を持って行った。米のご飯が食べられるのは遠足のときぐらいだった。父親が親戚のつてを頼って嘉手納で刺身屋を営むことになり、一家で引っ越した。当時、嘉手納ではすでに米食となっていた。

小学5年（1963年）に備瀬に戻ると、父親はサバニでの近海漁を主として、サトウキビ栽培も手がける半農半漁で生活を立てた。獲ってきた魚は母親が集落内を回って売った。小中学生時代、ヤギの草刈りとランプのホヤ掃除は子どもたちの役目だった。家には天水を溜めるコンクリートの水タンクはあったが、水が減るとウイガーに水を汲みに行った。家に水道が入ったのは中学時代で、電灯が終夜灯になったのは卒業してからだった。小学6年のころに初めて、母方の祖父と父と一緒に「ウガンのヤンシリー（備瀬崎灯台の後ろ）」での漁に参加した。当時は、風を受けた帆と人力を頼りにサバニを操っていたため、「エークを持ったら一人前」と言われていた。海人（漁師）たちと一緒に漁に出たときは「ウミシンカ（漁師仲間）」に入れてもらえことが嬉しかった。中学時代、夜に父親と一緒に、山川（上本部村内のムラ）や今帰仁方面まで舟を漕いで漁をした。このころムラには、エンジン付きのサバニも入っていたが、夜の漁は扱い慣れた手漕ぎのサバニだった。

1967年に中学校を卒業。備瀬の男子同級生21人のうち、高校へ進学した者は半数に満たなかった。彼は遠洋漁業のマグロ船に乗りたかったが、名護で割烹店を営む叔父に誘われ、板前の道に入った。やがて普天間に移って板前を続けた。その稼ぎで、沖縄ではまだ出始めのカラーテレビを実家に贈ったことがある。1980年28歳で帰省したさい、給料の良さに惹かれムラの建設会社で働くことにした。母親は近くにできた病院でヘルパーとして働きに出

るようになった。このころ、リーフの外側に長い網を張って引き潮とともに魚を獲る「パージナ」と呼ばれる海人総出の漁が途絶えている。その後、東京への出稼ぎなどを体験したのちに結婚。職場は変わったが現在まで建設業に従事してきた。その傍ら、父親が遺した船外機付きのボートの舟主兼網元として、仲間とともに海に出て追い込み漁などを続けてきた。

1960年代の半ば、彼のような網元の家に生まれた人でさえ、中学卒業後にムラに残って海を相手に生活を立てるという選択は考えなかったという。ムラを離れて賃労働に従事することは当然のことで、同級生たちもまたほとんどそうしている。彼は、28歳でムラに戻ってからは建設業による稼ぎによって生活を立ててきたが、一方で仲間と漁に出ることも手放さなかった。

2. グソーに来た海洋博

備瀬の南端を含む海洋博の会場が正式に決定されたのは1972年2月末のことであった。その直後の3月に実施された沖大調査は、ガジマルグワの向こう側に広がるグソーに点在する墓群についてつぎのように報告している。「ティガニク（南兼久）に墓が造られたのは、乾降年間（1736～1795）と言われ、その後クバマバル（小浜原）、さらに第二次大戦後交通の便利なスマバルに墓が造られた¹⁷」。ティガニクは海岸縁の岩崖地であり、クバマバルはその上の畑地で、スマバルはさらにその上の緩斜面で現在の県道114号の沿線である。したがって、墓群は海岸から上手の道路沿いへと徐々に移動し広がっていったことがわかる。同調査はまた、202基の墓を確認できたとし、形状ごとに分類してつぎのように報告している。

「墓の基数はスマバル、クバマバルー亀甲墓30基（横穴式21基、平地式セメントブロック造り9基）、破風墓65基（全てセメントブロック造り）、掘り抜き墓30基、平草墓2基、計127基。ティガニクの墓はスマバルの新しい墓に移葬し、現在空き墓が多いがこれらは仮墓に使われているものもある。掘り抜き墓51基、亀甲墓（横穴式4基、平地式ブロック造り1基）、岩陰墓13基、平草墓4基（うちセメントブロック造り3基）、破風墓1基（ブロック造り）、亀甲墓と破風墓折衷1基（セメントブロック造り）、以上75基。総計202基確認¹⁸」。

全202基の墓のうち掘り抜き墓や岩陰墓が半数近くを占めることから、当時はまだ風葬の名残をとどめ、石灰岩の崖にあった自然洞穴などを利用した墓が多かったことがわかる。これらの墓のうちティガニクおよびクバマバルにあったもののほとんどは、海洋博の会場造成のさいに東方の丘陵地に造られた集団墓地に移転されることになった。その数は363基と記録されている¹⁹。

海洋博の会場工事が進められるころ、ヌルさんは、家の門口や生垣で、あるいは路上や畑で、幾度もハブに出くわしている。じっさい畑で遭遇したときには、足袋の上から脛あたりを咬まれてもいる。幸いにも足袋の上部を折り返して履いていたため、毒牙は皮膚にまでは達しなかった。咬まれた箇所には2つの牙の跡が残り、毒のために布地が黄色く変色してし

まった。彼女は、これら立て続けに起こったハブの襲撃を墓の移転への抗議として受けとめた。そしてお宮に座り、墓の移転は自分の意志ではなく、国とムラの有力者が合意したものだから、そちらに知らせてくださいと拜んだ。さらに彼女は、不思議な夢を見せられる。洗骨後の遺骨を納めたジシガミ（厨子甕）が行列をつくり、海洋博会場となった墓地からマーウイ（集落南に位置する馬場）を通ってお宮の前に集まり、そして東に進路を変えると、グシク山の脇を通ってさらに上手にある移転予定地に進んで行った。ジシガミが擦れ合う音なのか、「ゴンゴンゴンゴンして向こうに」行ったのだという。

〈ジシガミの行進の夢〉 [2014-12-12]

ヌル：海洋博が来て、この墓がね、ぜんぶ向こうにやる（移転させる）というときに、ハッサヨー（感嘆詞）もうほんと、夢ではあるけどよ、ほんとに怖かったのはや、このジシガミとってあるでしょう、遺骨入れてあるの。あれには、こっちはジシガミと言うから。これがよ、いまの海洋博のところからね、うちに見せるのはよ、海洋博のところから、ぜんぶこの遺骨がよ、この甕に入れた遺骨がぜんぶ向こうから来て、お宮の前でよ、ぜんぶ集まってよ。ほんと怖かったけど、夢ではあるから。またこれがね、向こうに、あの〔言葉が出ずに詰まる〕

聞き手：あの、共同（集団）墓地のところ？

ヌル：うん。ところに行くのよお。ほんともう夢ではあるが怖かったわけさ。だからほんとにはや、グソーはグソーのバンがあるから、こっちは墓は造る。この備瀬からは東はカミ（神）でしょう、^{うえ}上だから。また向こう（集団墓地の方角）にはあれもあるさ、グシクも。だから、うちに教えるのはや、こんなしてグソーの人がこんなして来るのは（よくない）、グソーはグソーの向こうに墓造って、こっちはもうカミだから、こっちは墓は造らさないでという、うちには言っているけど。うち一人が向こう（移転を決めた側）に言っても、聞かないさーね。

墓群を移転させる東方は、太陽が昇る神聖なる方角であり、ムラの御嶽であるグシク山もある「カミバン（カミの領域）」である。遺骨の入ったジシガミが行進する夢は、墓をこの東に、しかもグシク山よりもさらに上手に移すというのは、カミバンを侵すことになるということ教えようとしたと彼女は理解した。そして今でも、墓の移転先は「グソーバン（死者の領域）」にあたるスマバル周辺にすればよかったと思っている。

ムラ内のユタであった玉城マツさんは当時、ムラの有力者たちにたいして、「自分は言える身分ではないが、あなたたちは“官（町や県、国）”にもものを言える立場にあるのだから、ムラの拜所（ガンヤーやパマガーなど）はきちんと残すようにと伝えてほしい」と、三度は訴えたと言っていたという。しかし、これらの拜所をどう扱うべきかについて神人たちが相談を受ける機会は訪れなかった。

会場の建設工事を終えて「エキスポランド」という名の遊園地となった土地には、ジェットコースターや観覧車のなかに、神人たちがガンヤーガマと呼ぶ岩場のムラ墓と周囲の森は残されていたが、かつて龕を納めたガンヤーは撤去されていた。そして、パマガーがあった浜辺は海に突き出た人工ビーチとなって湧泉の井戸は消えていた。水が湧いていたとおぼしき場所には「汚水」と書かれた蓋がされていたと、根神の松枝さんは今も残念そうに教えてくれた。海洋博が終わってからもしばらくこうした耐えがたい状態が続いたが、神人たちは区長を通じて海洋博記念公園側に要望を伝えた。その結果、蓋は中をのぞける格子状のものに換えられた。

V. グソーをまもる

1. ホテル建設とグソーの役場

(1) ホテル建設の過程で

海洋博の会場は、会期後には国営の海洋博記念公園として運営されてきた。グソー側に建てられた遊園地は民間会社が経営を引き継ぎ、2000年まで営業を続けた。この間、神人たちはハー拝みの日にはその敷地内に入って、ウイガーでの御願を重ねてきた。遊園地が閉園するとこの土地はしばらく更地となっていたが、やがてリゾートホテル建設の計画が進められることになった。ホテルの運営会社はその建設に先立って、地元の理解を得るためにヌンドウンチの再建費を寄付することを申し出た。この建物は、ヌルヒヌカン（火の神）が祀られ、年中の神行事のさいに神人たちが集って最初に手を合わせる所だが、老朽化が進みシロアリの被害にも悩まされていた。だから、その建て直しはヌルさんをはじめとする神人たちが望んでいたことでもあった。2010年8月、ムラの建築会社が請け負ったヌンドウンチの落成祝いが催された。

ホテルの建設地はかつて多くの墓があった土地であったことを会社側も知っていた。2012年5月、ホテルの本体工事に先立つ地盤整備のさい、敷地内で6体の遺骨が出ると、県道沿いに写真入りの「無縁墳墓等改葬儀広告」を出して対応している。2012年12月には、地上12階で客室238室、全室オーシャンビューというホテルの概要が発表され、本体工事が始まった。かつてガンヤーのあった岩崖地には、ムラ墓のガンヤーガマを含むいくつかの墓が、海洋博時にも移転されずに残されていた。ウイガーはこれらの墓所からほど近く灌木が生い茂る陰に隠れるようにしてあった。ホテル側はこれらの岩場を「拝所（うがんじゅ）の森」と仮の名を付け、神人たちの指示を仰ぎながら整備する方針をムラ側に伝えていた。そうしたなか、2013年4月にふたたび、ウイガー付近で遺骨が1体発見された。その後の出来事にホテル側は戸惑い、神人たちに助けを求めてきた。

2013年5月29日、四月大御願の神酒づくりを進めるなかで、ヌルさんたちが話してくれた

事の顛末はこうだった。掘り返された遺骨は、頭蓋骨の上半分で、その大きさからみて子どもものと思われた。その後、建設現場で働く首里出身の男性が頭痛を訴えはじめた。神人たちは事前にホテル側にたいして「自分たちは無縁墓には関わらないから、遺骨が出たらお坊さんに頼みなさい」と伝えていたのだが、請われて関わることになった。当の男性に会ったヌルさんは、話しもせず笑いもしない様子を見て気の毒に思いながら、出骨した場所で手を合わせた。そのさい、「とつぜん驚かせてしまったけど、この人は工事に来ている何も知らない人だからゆるしてあげてください。お坊さんが無縁仏を納めるところまでお供しますから」と遺骨の主に語りかけ、その霊を鎮めた。それから男性の頭に塩をかけて清め、「毎日、塩を持ってお祓いをしなさい」と伝えた。その結果、彼は表情を取り戻し、元気になった。

現場監督の責任者は、この遺骨事件が起こる前から、毎月一日と十五日の御願のさいには部下を数名連れてヌドウンチにやって来て、菓子折を供えて手を合わせていた。ときおりお宮の周囲を掃き掃除もしていたという。その後、「拝所の森」は約束どおり整備され、ガンヤーのあった場所には赤瓦を載せた家形の祠が設置された。そのそばに建てられた案内板には、ホテル支配人の名で次のように記された。

「ここは備瀬区民が先祖の霊を敬い、神々への祈りを捧げる拝所にして、大切に守り続けてきた聖地です。約三百五十年前の備瀬区村落形成時に出来たと推測され、拝所の中には祠と門中墓が二つずつ置かれています。井戸水は戦前戦後生活用水として利用されていました。備瀬区には伝統行事や豊年祭など、現在も年百回以上の神事や御願（ウガン）行事があり、備瀬区の皆さんは現在でも、この大切な拝所に足を運び、無病息災と豊年祈願に手を合わせています。お祈りの妨げとなる行為はおやめください。（中略）聖地への敬意と伝統へのご理解をお願い致します」

「年百回以上の神事や御願」という記述はややオーバーだが、昔ながらの御願を現在も続けている信仰篤い土地であることを伝えようとしているのがわかる。ヌルさんによれば、先の監督者はホテルの完成後もひと月ほど現地に残り、畑に彼女の姿を認めるとかならず声を掛け、歩み寄って話し込んだという。「このナイチャー（日本本土の人）はほんとうの信仰者だったと思う」と彼女は繰り返した。海洋博のときには、拝所の扱いについて神人たちに何の相談もなかったこととの対比が、彼女の頭の片隅にあるのかもしれない。もちろん、このホテルの建設を巡ってはムラ内に様々な意見がある。ヌルさん自身もまた、ホテルの進出を手放して喜んでいるというわけではなく、両義的な思いを抱えているようにもみえる。2014年7月、このホテルは営業を開始した（写真4）。

(2) グソーの役場に戸籍を登録する

子どもが生まれたときに役場に届け出るように、死者の世界にも「グソーのナナヤクバ（七役場）」において戸籍を登録するための手続きが必要とされる。そして、その登録の日は（旧暦）1月16日と定められている。このナナヤクバがどこにあるのかとヌルさんに聞くと、具



写真4 整備されたウイガーで拝む（2015年ハ一拝み）

体的な場所は示されなかったが、おおよそガンヤーガマ辺りとみなしているようだ。かつて水汲みに行く子どもたちが死者の影を感じて足早に通り過ぎたこのガンヤーの周辺も、ホテルの建設に伴い、その影はだいぶ薄くなった。

ムラ人たちは、この1月16日を「十六日（ジュールクニチ、ミーサともいう）」と呼んで、前年の十六日以後一年間で亡くなった人のいる家を訪ね、焼香する。午前中には家族揃って重箱を持って先祖の墓参りをしてから、午後になると各世帯の代表者が焼香すべき家々を巡る。この日は、中南部に住むムラ出身者も多数訪れるため、ムラ内は人の往来が増える。一方、遺族は、訪問客を迎える合間を縫って、故人のマブイがグソーのナナヤクバに戸籍を無事に登録することができるようにと、送りの拝みを行う。

2016年のその日、長年連れ添ってきた夫の栄さんを前年の夏に亡くしたヌルさんが、松枝さんとともにこの拝みをする現場に立ち会った。

〈十六日の拝み〉 [2016-02-23]

16時すぎ、それまで十六日の焼香客を迎えていたヌルさんは、松枝さんとともに外に出た。門口のスージ（小道）に石を置き、そこに火を点けた線香を立てかける。その手前に膳を供える。膳の上には、2本の銚子に入った酒、重箱（餅、三枚肉、揚げ豆腐、白かまぼこ、昆布、揚げ魚、島ダコなど）が載せられていた。そして2人は手を合わせる。家族もその後ろで做う。グソーで使うというウチカビ（紙銭）を3組焚いたあと、ヌルさんは重箱のご馳走に箸をつける所作をして、ふたたび2人は手を合わせた。その後、銚子からコップについだ酒を三回に分けて、線香にかけた。

拝みを終えた松枝さんが、ヌルさんの家族に「グソーに赴くには橋を渡る必要があるから、

この橋を無事に渡れるようにと拝んだ」と伝えていた。

この世からあの世に架かる橋は「アミダンバシ（阿弥陀の橋）」と呼ばれる。翌日、ヌルさんにこの橋を渡ることについて教えてもらった。

〈アラパシワタイ〉 [2016-02-24]

ヌル：この橋渡ってね、グソーナナヤクバに戸籍出すのは、「人前にも行かないで、後ろにも行かないで、中から立派に戸籍出してください」と言ってね、こっち（門口）からお願いするの。昔からあるからね、昔のようにやってるの。…グソーに行くのには新たに行くでしょう。もう去年亡くなっても十六日しないとね、この橋を渡れないという昔のあれがありよったからね、アラパシワタイ（新橋渡り）と言ってたよ。…新たにグソーに、グソーナナヤクバに、自分の亡くなった人の…〔言葉が出ずに詰まる〕

聞き手：戸籍をね、アラパシ渡って行くわけなんだ。

ヌル：だから昔はね、この橋を渡るときに、もしも（生前に）悪いことをやった人なんかはね、この橋から落とすという話もありよったけど〔笑う〕。…グソーに行くときに、悪いことなんかいろいろなことしたらね、こっちから立派に渡れないって、こっちから落ちるっていう話はあったけど。

この橋を渡るときには、人の前にもならず後ろにもならないことが大切という。だから、あまり早い時間帯にこの送りの拝みはしない。ヌルさんたちが行ったのも、頃合いを見はからった16時すぎだった。こうして送られたマブイは、グソーへの橋を渡ってナナヤクバで戸籍登録をすませ、ようやく正式な落ち着きどころを得ることになる。いま、ナナヤクバの背後にそびえ立つホテルは、グソーにやって来た死者たちにどう映るのだろうか。

火葬が行われるようになる前のムラでは、洗骨と呼ばれる改葬の儀礼があった。葬式から3年以上たつと適当な時期をみて、墓口を開けて遺骸を運び出し、骨をていねいに洗ってから厨子甕に収めなおして墓に戻した。そしてこの洗骨を無事に終えると、イチミとグソーの境界（ガジマルグワーから浜に下りたミジパイあたり）に赴いてその報告をする拝みがあった。目下、ヌルさんが案じているのは、洗骨が不要となったいま、この拝みを行うべきか否か、また行うとするならば、いつ、どのようにするかということである。

2. 再生の井戸

シリガーはムラの産井（ウブガー）で、かつて子どもが生まれるとこの井戸の水で産湯を焚いた。シリガーという名前の由来は、集落のシリー（後ろ、後方）にあるからと説明されることが多い²⁰。しかし根神の松枝さんは、産湯の水をシリガーから汲むことと結びつけて、シリは「しりる」から来ているのではないかと話し、つぎのように続けた。「しりるという

言葉には、脱皮する、生まれ変わる、という意味がある。ハブが脱皮しているのを見て、パブしりてーさー、シリガラー（ハブが脱皮して、脱皮後の殻）って言うさ。だから、この水の産湯を浴びてきれいになるということじゃないか」。つまり、生まれ落ちて最初に浴びる産水を汲む井戸だから、蛇の脱皮になぞらえシリガーと付けたという解釈である。彼女の見立ては、この井戸水に脱皮新生をうながす聖なる力を認めるものといえる²¹。

正月元旦にシリガーから汲んだ若水でウビナディ（お水撫で）をするという習慣も、同様の発想に立っている。ウビーとは、産井から汲んだ聖なる水を指す。人生は、一年という周期を巡り重ねながら過ぎていく。その節目である正月に、「とうしゃー、かじゅとういん、ちゃーわかげーわかげー（年を重ねても、いつも若々しく）」と唱えながら、若水を額に三度撫でつける。新たなる一年という周期の冒頭にさいし、若返りを願って聖なる水で生命を賦活する。ここでも、シリガーの水に循環のなかでの再生を導く力をみている。

そしてムラ人たちは、シリガーだけでなくパマガーの湧水にも、同様の力を感受していたと思われる。ここで、2016年12月に行われたミジナリーの様子を紹介したい。このとき亡くなったのは、ヌルさんたちとともに居神としてムラの神行事を支えてきた女性（1930年生まれ）だった。

〈神人たちのミジナリー〉 [2016-12-17]

備瀬に到着すると、前日の深夜に、神人を務めていた女性が亡くなったことを知らされた。次の日の午後、町の葬祭場で告別式が営まれることになり、私も参列して焼香した。ミジナリーもその日の夕方に行われると聞いて、パマガーの近くで待つことにした。遺族の中にこの儀礼の進め方を知る年配者がいなかったためにヌルさんたちが頼りにされ、彼女も「マッチちゃん姉さんはこれまできょうだいのように付き合ってきたから、うちらがやるよ」と応えて、儀礼の執行役を引き受けた。

17時ごろ、数台の車に分乗した30人ほどの喪服姿の遺族が、海洋博記念公園内の人工ビーチに到着した。①ヌルさんと松枝さんは遺族を先導するようにしてホテルの敷地内に入り、新しくなったガンヤーに赴き、誰が亡くなったのかを報告する拝みをした。②二人はパマガー付近の人工ビーチに移動すると、膳を供えて線香を焚き、海に向かって手を合わせた。後ろでしゃがんでいた遺族たちも続いた。それから、遺族たちは揃って波打ち際に歩いていき（写真5）、ひとりの男性がゲーナブチを潮水に浸け、参列者に向かって3回振り、飛沫をかけて清めた。そして神人の二人もこの飛沫を受けた。③一同は、パマガーに戻ってふたたび膳を供えて拝んだ後、井戸の蓋を開けて汲んだ水にゲーナブチを浸し、3回振って飛沫をかけ全員を清めた。

ヌルさんたちが同伴したのはここまでで、そのご彼女は遺族に、汲んだ潮水と井戸水を故人の家に持ち帰り、寝ていた部屋や家の周囲をまず潮水で清め、さらに井戸水で清めるようにと伝えた。



写真5 人工ビーチでのミジナリー（2016年12月）

このミジナリーの儀礼では、参列者はまず潮水を浴び、それからパマガーの水を浴びる。この水は山から流れてきたものだから、人びとは海の水と山の水を浴びることになる。まず引く潮とともに災厄が祓われるようにと潮水を浴び、そして湧水で身を清める²²。この二重の清めには、身内の死という難事を乗り越えて新たな人生を歩み出せるようにとの願いが込められているように感じられる。つまりここでも、浜辺の湧水に生まれ変わりをうながす力を見ている。山手に降った雨水が地下の水脈となって流れ下り、グソーの浜辺で山の葉とともに湧き出す。その姿に、再生の力を感じとったのはごく自然なことだったのかもしれない。

ムラ人たちはかつて、日が昇る東に向かって手を合わせ、「あがりティラ、おがまちくみそーり（昇る太陽を拝ませてください）」と唱え、太陽への感謝を込めた拝みを捧げてきた。誕生には東のシリガー、葬送には西のパマガーの水を浴びて生命の更新を願った。昔の人は昇る太陽にも、湧き出す水にも神をみていた。海の水は、太陽の熱によって蒸発し、上空で冷やされて雲となり、その雲が降らした雨水が山や森の地面にしみこみ、地下の水脈となって流れ、その道中で湧き出す。そして、この湧水はふたたび海に注いでいく。このような水の循環を古人が理解していたのかはわからないが、小さな島ではこうした自然の巡りはより感受されやすい。

神人たちの拝みは、生者と死者の関係を整え、人間と自然（カミ）の関係を調和させることにある。そこには、自然の循環と再生のなかに人間を正しく位置づけようとする姿勢がある。ムラ人たちの拝みも、かつては同じだったろう。イチミ（生者）の領域とグソー（死者）の領域をしっかりと分けたいうで、折りにつけて通い、交わる。毎月、新月の一日と満月の十五日には家のヒヌカンに手を合わせ、先祖が戻ってくる仏壇にお茶を供える。盆など年中

の折り目には仏壇にご馳走を供えて振る舞う。家族の誰かが亡くなったときには、イチミ（この世）に思いを残さぬようと丁寧な儀礼を幾重にも行い、新たな住処であるグソー（あの世）に送り出す。そして、1月の十六日や8月のマナーには手間をかけた重箱を抱えての墓参りを欠かさない。生者はいずれ自分もグソーの側に渡っていくことをどこかで想いながら死者たちに手厚い世話を重ね、死者が生者を見守ってくださるようにと手を合わせる。

家に水道が引かれて井戸への水汲みは不要になった。煌々と照らす電灯は夜の闇を遠ざけた。山とのつながりを実感させた薪取りは、どこから運ばれて来るのかもわからない燃料に取って代わられた。高速で車を走らせる舗装道路は自分の足で歩くことを難儀に変えた。そして毎日の食も、年中の稔りを神々に祈願しながら待つのではなく、賃労働で得たお金で調達するのがあたりまえとなった。社会基盤の整備と消費生活の浸透のなかで、人びとは自然の循環から抜け出し、神々を感じる場所と機会を手放していった。神人は、グシク山のある東方への墓の移転はカミの領域にグソーを持ち込む混乱とみなした。そして、グソーに人工ビーチや遊園地が造られるなかで拝所がないがしろにされるという事態は、生者による死者の領域への過剰な侵犯だと受けとめた。かつて一定の秩序で守られていたカミとグソーとイチミの関係が崩れ、調和は乱された。イチミの世界が限りなく拡大する一方で、グソーやカミの領域が縮小し忘れ去られることを神人たちは畏れてきた。彼女たちはいまま年の神行事のたびに、神々を感じる場所に座り、昔ながらのやり方で拝みつづけている。そうすることで、カミとグソーとイチミの秩序と調和を懸命にまもろうとしている。

【注】

- 1 語りを引用するさいの表記については以下のとおり。タイトル脇の [] は聞きとりを行った年月日、() 内は著者による内容の補足、〔 〕内は著者による語り場面の補足。語りの中の…は、中略。
- 2 山への薪取りについては次を参照のこと。石井宏典 [2017] 「自然との交わりの記憶：裸足と芋の世代が継承するムラの祭祀」、『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』（以下、紀要と略記）22, 1-32頁。
- 3 ムラの年中祭祀については次を参照。石井 [2014] 「祈りの姿勢：ムラの神行事を守りつづける神人たち」 紀要16, 1-31頁。
- 4 大胡欽一 [1965] 「上本部村備瀬の社会組織」東京都立大学南西諸島研究委員会（編）『沖縄の社会と宗教』平凡社, 123-156、桜井徳太郎 [1973] 『沖縄のシャマニズム』弘文堂、をあげておく。
- 5 仲田栄松 [1984] 『備瀬史』本部町備瀬区事務所発行, 25頁。
- 6 彼女のノロとしての歩みについては、次を参照。石井 [2014・2015] 「ムラが生んだノロ（上）（下）：沖縄一集落に生きる神人のライフヒストリー」, 紀要17, 1-30頁および18号, 1-29頁。
- 7 本稿では、フィールドでのふだんの呼びかけと同じくこのように表記する。
- 8 仲田 [1984] 前掲書, 311頁。
- 9 仲田 [1984] 前掲書, 313頁。
- 10 沖縄大学・沖縄学生文化協会（編） [1973] 「本部町備瀬部落・第三次宮古島調査報告」『郷土』11, 37頁。

- 11 仲田 [1984] 前掲書, 159頁。
- 12 名嘉真によれば、葬式の夜に行われる「ムヌウーイ」と呼ばれる魔物追いの儀礼が他の地域でもみられた。籠をかついだ4人が、「塩水をまきながら、砂利または豆をまきながら、「アネアネ」「クマクマ」「ホーホー」といって、棒切れで（家の一引用者注）壁をたたいて魔物を追い払い、そして「村はずれまで3名もしくは4名の者が魔物を追っていく」。名嘉真宜勝 [1989]「沖縄の葬送儀礼」渡邊欣雄（編）『祖先祭祀』凱風社, 241頁。また赤嶺は、葬式の日死霊についてつぎのように指摘する。「死んだ直後の死霊がある種の畏怖の念でもって観念されていることは、葬式の日、ムラの家々では、死霊の侵入を防ぐため屋敷の入口に竿を横たえたり灰をまいたりする習俗により窺うことができる」。赤嶺政信 [1989]「沖縄の霊魂観と他界観」。渡邊欣雄（編）前掲書, 424頁。
- 13 仲田 [1984] 前掲書, 161頁。
- 14 「一般にマツイワカシ（魂分かし）と呼ばれる儀礼は、死霊と遺族の生霊を分離するための儀礼といわれ、現世に執着する死霊を、死霊の本来住まうべき世界である他界に落ち着かせる意図をもって行われる」。赤嶺政信 [1989] 前掲論文, 424頁。
- 15 沖縄大学・沖縄学生文化協会（編）[1973] 前掲報告書, 37頁。
- 16 本部町史編集委員会（編）[2002]『本部町史・資料編4・新聞集成・戦後米軍統治下の本部』を参照した。
- 17 沖縄大学・沖縄学生文化協会（編）[1973] 前掲報告書, 48頁。
- 18 沖縄大学・沖縄学生文化協会（編）[1973] 前掲報告書, 48-49頁。
- 19 仲田 [1984] 前掲書, 369頁。
- 20 『備瀬史』も「後井戸」という字を当てている。仲田 [1984] 前掲書, 412頁。
- 21 沖縄において、神事のさいに心身を清める水や元旦の若水、産水をスディ（孵で）水と呼ぶ。スデルとは、蛇の脱皮や雛の孵化のように、聖水に触れて新生、再生することをいう。湧上元雄 [1983]「スディ水」『沖縄大百科事典・中』沖縄タイムス社, 531頁。備瀬周辺では、この「スデル」を「シリル」と言う。脱皮と生命の更新については、吉野裕子 [1999]『蛇：日本の蛇信仰』講談社、も参照。
- 22 ヌルさんによれば、子の誕生のさいにも産着をまず潮水で洗い、そしてシリガーの水で洗ったという。このとき、魔除けのビジャイナー（左縄）を腰に巻いた。彼女のお産のときには母親が洗ってくれた。また、麻疹のときにも患部にシリガーの水をなでつけた。

本研究は、JPSP科研費（21530652, 25380841, 16K04255）の助成によって支えられた。